

ささやき

編集・発行 特定医療法人 明和会 琵琶湖病院
聴覚障害者外来スタッフ

FAX : 077 - 579 - 5487
TEL : 077 - 578 - 2023
E - Mail : mimi@biwako.or.jp

言葉の向こう側

医師 宿南 浩司

聴覚障害のある方に対する配慮は医療においてどの程度実現されているのでしょうか。聴覚障害の方には、病院での診察待ちの際申し出てもらうように表示されている病院が多くなってきました。今後もさらに障害による不便を解消する工夫がなされることと思います。

さて、我々精神科医にとって、診断材料の多くは患者さんの言葉から得られます。逆に患者さんの言葉をそのまま受け取ることが医療上の判断を誤らせる結果になることも少なくありません。常に表情、仕草、状況なども同時に観察することが求められます。そんな中で、言葉を話す、あるいは聞き取ることに障害がある患者さんの場合、我々は大きな情報源を逃してしまっていること

が多いのも事実です。例えば筆談、手話で対処する方法もあるでしょう。しかし、我々の方がそういう方法論に執着してしまい、他の観察を怠ってしまうことが私の少ない経験上もありました。むしろ、言葉からの情報が得にくい患者さんにこそ、言葉以外にも神経を研ぎ澄ませて接する必要性を感じています。

こう考えていくと、聴覚障害のある患者さんに限らず、障害による不便を解消することだけが重要なのではないのかも知れません。どのような障害をもつ人にも医療の質を確保する努力が必要だと思います。言葉以上の非言語的な訴え、感情をくみ取れるような医療者でありたいと思っています。



最近のトピックス

3月7日、岩手県・耳の日大会が北上市で開催され、医師の藤田が「聴覚障害者の病院でのバリアフリーを目指して」と題して記念講演を行いました。岩手では情報提供施設の建設運動が進みつつあり、大変盛りあがりのある大会となっていました。

3月18日、石川県手話通訳士学習会が金沢市にある石川県聴覚障害者センター内で開催され、心理士・古賀が「聴覚障害者のメンタルヘルス」について講義しました。当日は、手話通訳士の方々だけでなく、病院の看護師やソーシャルワーカーの方も参加されていました。

実習・見学に来られた方々

3月29～30日 日本赤十字看護大学・精神保健学専攻・大学院生

4月6日 四国学院大学・社会福祉学科学生

『フルーツバスケットゲームでの出来事』

作業療法室 近藤 恭子

二ヶ月前、病棟の作業療法でフルーツバスケットを行った。そのメンバーの中に聴覚障害を持った A さんがおられ、私は手話通訳を担当することになった。A さんにゲームの方法を手話にて説明しようと試みたが「あれ、これではうまく伝わらないなあ」という気持ちが起こってきた。どうやったらうまく伝えることができるのだろうかと思いつきながらの手話通訳となってしまう。A さんは、『うんうん』と頷き、一見理解した様子であったが、実際行ってみると理解されていないことがわかった。A さんはゲームを行うことがしんどくなったのか途中より見学されていた。方法を手話で伝えるにあたり、必要とする一つ一つの単語の表現方法はそれほど難しくはない。だが、うまく伝えられず理解されない。パズルに例えてみれば、私のピースの組み合わせは合っておらず、絵になっていなかった。円形に並べられた椅子の中央に立った人は題を出す（例として「今メガネをかけている人」など）。椅子に座っているメンバーは題を聞き、自分に当たると思えば立ち上がり別の空いた席を見つけ座る。同時に題を出した人も空いた席を見つけて座る。席に座れなかった人は円の中央に立ち新たに題を出す。「フルーツバスケット」と出されれば皆が立ち上がり席を見つける。このような方法をわかりやすく手話で伝えることはなかなか難しいとつくづく感じた。

～ 実習生・ボランティアの声～

ボランティア 菅沼 昭友

皆さん初めまして。今年の 4 月より毎週木曜日にこちらでボランティアをさせていただいている、菅沼と申します。京都文教大学の大学院で臨床心理学という学問を学んでいます。主に、心理相談室か開放病棟での作業に参加させていただいています。

こちらの病院には聴覚障害者外来があること、藤田医師や古賀心理士の論文を読み感銘を受けたこと、きこえにくい人のコミュニケーションに興味がある

『聴障患者さんとのコミュニケーション』

A - 2 深尾 和弘

男子急性期病棟で、数十名の聴障患者さんの看護を行って来ました。病棟には手話ができるスタッフは殆どいないのが現状です。入院されてきて最初に困難となるのが、コミュニケーションです。聴障患者さんでも手話レベルは様々で、完璧に行える方、必要最低限行える方等です。その中でスタッフが対応するとすると、主な手段は筆談、ジェスチャーとなります。互いの意思疎通が不十分となり、患者さんは自己の気持ちが十分に伝わらないことで、フラストレーション・焦燥が高まったりと、治療がスムーズに行かない場合も多々見られます。しかし、患者さんの人間性・性格・特徴などを日数が経過するとスタッフも徐々に把握し、信頼関係が築け、十分なコミュニケーションが図れるようになります。精神・聴覚という二重のハンデを持っている入院患者さんであっても、患者さん/スタッフの間に信頼関係が生まれることにより、円滑な看護が行えます。

～わんぽいんと手話～

【上手】



左腕を右手のひらで
なでる

【下手】



左腕に沿って
右手のひらをはねあげる

ことなどの理由でボランティアをしたいと思いました。病棟内にある、患者さん主体の手話の勉強会に参加した時には、ソーシャルワーカーが使っている手話を一生懸命に真似て、きこえない人に話し掛けているのを見て、強く印象に残りました。

そのような患者さん同士のやり取りや、ドクター、看護師、ソーシャルワーカーや心理士といった看護スタッフの関わり方等から多くのことを学びたいと思います。

【編集後記】

皆様快く原稿依頼を引き受けて下さり、無事今期が終了します。ご協力ありがとうございました。